

実践報告

質的研究教育のための「フェルトセンスから語る」体験

TAE ステップを用いて「庭の詩」を作成する実習を例として

発行：2024 年 3 月 15 日

土元 哲平（中京大学，立命館大学ものづくり質的研究センター）

小田 友理恵（法政大学）

抄 録

本研究の目的は、質的研究教育における言葉や言語化についての理解を深める教育のあり方について示唆を得ることである。そのために、「質的研究法」講義において実施された、TAE ステップを用いて「庭の詩」を作成する実習の感想を分析・考察する。授業の感想は KJ 法を用いて分析した。その結果、質的研究法の初学者であっても TAE ステップの体験を通して、フェルトセンスを言語化し、言葉に対する理解を深めることができる可能性が示唆された。特に興味深い点は、受講生がより広い文脈への気づきを記述していたという点であった。そこでは、個々人の意味感覚や言葉の多様性への気づきや、インタビューを実施する際に他者の言葉に対する思慮が必要であることが記述された。本研究は、90 分間で「詩を作成する」という小規模な実習においても、受講生が TAE ステップを実践することで言語化という一般的なプロセスに対して理解を深めることができたことを示している。本研究は、初学者であっても TAE ステップにおいて根幹となる「フェルトセンスから語る」ことが体験できるという点を示したという重要な意義があり、TAE の考え方を社会実装していくための一つの足掛かりとなる。

キーワード：言語化，フェルトセンス，ジェンドリン，
辺縁で考える（TAE），質的研究法

連絡先：土元 哲平（E-mail: tsr29magi@gmail.com）



pp. 35–47

Practical Research

“Saying-from the Felt Sense” Experiencing for Qualitative Research Education

An Example of Practice by Creating a “Garden Poem”
While Using the TAE Steps

Published: March 15, 2024

Teppei Tsuchimoto (School of Psychology, Chukyo University)

Yurie Oda (Faculty of Social Policy and Administration, Hosei University)

Abstract

This study suggests how students can deepen their understanding of language and verbalization in qualitative research education. For this purpose, we analyze and discuss the students' reflection of the practice of creating a “garden poem” using the Thinking At the Edge (TAE) steps conducted in the “Qualitative Research Methods” lecture. The reflections were analyzed using the KJ method. The results suggest that even beginning students of qualitative research methods may be able to verbalize their felt sense and deepen their understanding of language through the experience of the TAE steps. The fascinating point was that the students described their awareness of the broader context - for example, noticing the diversity of individual senses of meaning and language and the need to be thoughtful about the language of others when conducting interviews. This study shows that even in the small-scale practice of “creating a poem” in 90 minutes, students could deepen their understanding of the general process of verbalization by practicing the TAE steps. This study has an essential significance in that it has shown that even beginners can experience “saying-from the felt sense,” which is a fundamental aspect of the TAE steps, and it provides a stepping stone for the social implementation of the TAE.

keywords: verbalization, felt sense, Gendlin,
Thinking At the Edge (TAE), qualitative research

Correspondence concerning this article should be sent to:
Teppei Tsuchimoto (E-mail: tsr29magi@gmail.com)

I 問題と目的

質的研究法は、人々がどのように経験を意味づけているのかを深く理解することができる方法である。この質的研究法は、2000年以降になると、著者らが専門とする心理学の研究者の間でもかなり広く知られるようになり、心理学研究法の一部としても無視できなくなってきた（能智 2005）。本研究では、X大学Y学部（私立大学、文系学部）にて開講された「質的研究法」講義において実践した、TAE ステップ（Thinking At the Edge Steps; Gendlin 2004; 得丸 2016）を用いた「庭の詩」実習に焦点を当てる。具体的には、この実習における目的やデザインについて詳述した上で、受講生の感想における記述内容を検討する。それらを通して、質的研究法教育（以下、質的研究教育）について、特に言葉や言語化に対する学びという観点から示唆を得ることを目指す。

質的研究者は「意味に対する関心を持つ」、つまり、人がどのように世界を理解するのかや、人が出来事をどのように経験するのかに関心を持つ（Willig 2001=2003）。この「意味（づけ）」には、言葉が深く関わっていることは論を俟たない（e.g. ヴィゴツキー 1934/2001）。さらに、質的研究には、人間や社会の現象を捉えるために新しい言葉を創造する（つまり、「意味の単位」¹⁾を創造する）という特徴がある（得丸 2010）。人間のライフは、日々ダイナミックに変容しており、「既成の」言葉では理解できない現象も存在する。質的研究法には言語化、つまり新しい「意味の単位」を創造することを通して、これまで捉えられなかった現象や人間の個別的な（unique）心理学的プロセスを理解する足掛かりを提供す

るという意義があるといえる。

以上で述べたように、言葉や言語化についての理解を深めていくことは、質的研究のプロセスに本質的に関わっている。こうした理解の重要性については、質的研究法入門書など（例えば、やまだ 2007）においてもしばしば指摘されてきた。しかし、質的研究法の教育という観点から、経験の言語化の方法や姿勢についての学びをどのようにデザインし、学習者がその経験をどのように意味づけているのかという視点は、これまで充分に取り上げられてこなかった。

1 「質的研究法」講義の目的とデザイン

「質的研究法」講義の目的は、現場（フィールド）を生きる人々のライフを理解するための質的研究法の理論と活用の基礎を学ぶことであった。本講義は、受講生が自らの関心に基づいてリサーチクエスチョンを設定し、自らデザインした研究を実践することを中心として、いくつかの質的研究法の演習も行うものであった。本講義全体の内容と実施形式を表1に示す。

ここで、本講義と質的研究法に関わる先行知見との関連について言及したい。やまだ他（2007）は、質的研究の基礎実習におけるミニマム・エッセンスとして①フィールド体験型、②多技法要点型、③特定技法習得型、④研究プロセス型の4つのタイプを提案している。この考え方によれば、本講義は④研究プロセス型を主軸として、②多技法要点型の学習も行うものであったといえる。④研究プロセス型を主軸とした理由は、実際に受講生自身が関心を持つテーマで質的研究を経験することは、質的研究法における研究デザインについて学ぶことにも繋がり、また講義で得た知識と自分自身の研究を有機的に関係づけていくことができると考えたからである。②他技法要点型も取り入れた理由は、質的研究法においてはその方法論の多様性から、研究者によって様々なデータの理解、言語化、表現が試み

1) 「意味の単位」の創造の例として、得丸（2010）は「フリーター」という語を挙げている。この言葉（ターム）が創造されたことによって、新しい労働形態を「指し示す」ことができ、論理的推論・仮説の検証ができるようになった（得丸 2010）。

表1 「質的研究法」講義内容と実施形式

講義の回数・内容	実施形式
第1回 導入、グループ編成	対面
第2回 質的研究とは？質的研究のデザインについて	対面
第3回 研究テーマ探索、成果発表の方法についての解説	オンライン
第4回 研究テーマ探索、文献調査	オンライン
第5回 質的研究法実習①KJ法	オンライン
第6回 質的研究法実習②複線経路等至性アプローチ	オンライン
第7回 質的研究法実習②複線経路等至性アプローチ、質的研究の実践例	オンライン
第8回 研究提案会①	オンライン
第9回 研究提案会②	オンライン
第10回 質的研究法実習③TAEステップ（本稿における分析対象）	オンライン
第11回 ナラティブ・アプローチ、文字起こしの方法、研究倫理	対面
第12回 個別相談	対面
第13回 個別相談	対面
第14回 研究発表会①	対面
第15回 研究発表会②、授業のまとめ	対面

られているという点を理解する必要があると考えたからである。

本講義の受講生のほとんどは、質的研究法の初学者であった。したがって、第1回の講義においてグループを作成し、そのメンバーを中心とした質的研究のプロジェクトやワークを通して学ぶこととした。本研究では扱わないが、質的研究の初学者が陥りやすい落とし穴の一つとして、自分自身の解釈の枠組み（ものの見方）に沿ってデータを恣意的に解釈する場合がある。この恣意的な解釈を避け、自分自身の解釈の枠組みを相対化するために、他者と共同でデータを解釈するという過程が重要であると考えたからである。

2 第10回講義：

TAE ステップによる実習の概要

本研究で主題となる第10回の講義では、TAE ステップ（Thinking At the Edge Steps; Gendlin 2004; 得丸 2016）による実習を行った。TAE とは、何か言葉にしようとするの다가最初は漠然とした「からだの感覚」としてだけ浮かんでくるものを、新しい用語を用いてはっきりと表すための系統だった方法である（Gendlin 2004; 得丸 2016）。この「からだの感覚」は、フェルトセンスと呼ばれる。ジェンドリン（Gendlin 1992）によれば、人々の「からだ」は、環境との相互作用から成っており、人はある状況の全体を「からだ」の感覚として感じることができる。さらに、フェルトセンスは、単に感じられるだけでなく、知的なものでもあり、状況に対する解釈や説明が含まれている（Gendlin 1968）。TAE を実施するために提案された具体的な方法が TAE ステップであり、「フェルトセンス」と「形式」の往還によって、言語の論理的な使用と体験的な使用を区別し、その「両方を体系的におこなう」ことを特徴とする（得丸 2016）。

近年、様々な質的研究法が提案されているが、その中でも TAE ステップを本講義に取り入れた理由は次の通りである。TAE ステップは、「フェルトセンスを言語化する」というプロセスを体系化した方法である。そして、こうしたフェルトセンスを言語化する営為は、質的データを分析したり、研究論文を執筆する際に避けられないものである。例えば、インタビューで語られている内容の「理解」は、本質的に、身体的に感得されるフェルトセンスの一種であると考えられている（得丸 2020a）²⁾。また、研究者自身が、フィールドワークなどで経験した関係性や、他

2) したがって、インタビューの分析に TAE が用いられるなど、研究者のフェルトセンスが戦略的に質的研究の分析に用いられる場合もある（末武他 2016; 得丸 2018; 得丸 2020a）。

者との相互行為には、身体的な意味感覚が含まれている。もちろん、質的研究において、どの程度フェルトセンスを意識化して扱うのか、また、たとえ意識化していたとしても、どの程度明確に言語化するのかは、研究の目的や採用する方法に依っている。しかしながら、フェルトセンスを意識して質的研究に取り組むことは、研究者のリフレクションにも寄与するという点で、より豊かな研究に繋がると考えられる。

受講生は、第8回、第9回の講義において、自らのグループが進めていく質的研究プロジェクトの提案を行っている。そして、第10回以降は、その提案をもとに研究プロジェクトを進めていくことになる。したがって、第10回の講義というタイミングにおいてTAEステップの実習を実施することには、受講生のプロジェクトで扱う質的データの分析を深めるという意図もあった³⁾。第10回講義の実際のタイムテーブル、実施者を以下の表2に示す。

表2 第10回の講義のタイムテーブル

内容	時間	実施者
授業の導入およびテーマについての説明	約7分	第1著者
TAEステップについての説明	約10分	第2著者
TAEステップの実習	約47分	第1著者、 第2著者
シェアリング（全体）	約7分	
シェアリング（グループ）	約7分	
グループで話した内容の報告	約5分	

TAEステップの実習中には、第1著者もTAEステップを実施し、受講生のフェルトセンスに過度に干渉しないように配慮しながら、その過

程を適宜受講生に例示した。なお、全体のシェアリングでは、感想または詩の自主的な発表を募った。グループでのシェアリングでは、zoomのブレイクアウトルーム機能を利用し、メンバー間で「感想または自分が気に入ったフレーズ」を発表し合うように伝えた。

第10回講義には、13名の受講生全員が出席した。これらの受講生に対してTAEステップによって詩を作成するワークを実施した。このワークは、得丸（2008）がTAEステップについての初学者向けの書籍において紹介している「マイセンテンスを詩にしよう」というワークに依拠したものであった。このワークは、個人のフェルトセンスを凝縮した一行詩風の短文であるマイセンテンス（TaeJapan 2015）を利用して詩を作成するものであり、TAEステップによるフェルトセンスの言語化のプロセスを短時間で学ぶ教材として有用であると考えられる。

(1) マイセンテンスシート

- ・①テーマ ※テーマを1つ選び、「この感じ」として持つ。下に事柄をメモする
- ・②浮かんでくる言葉 ※「この感じ」のフェルトセンスを感じながら書く ※大事な言葉に下線を引く
- ・③仮マイセンテンス ※フェルトセンスを短い1つの文にする。語も文型も自由に作る ※最も大事な言葉に二重線を引く
- ・④空所のある文 ※仮マイセンテンスの二重線の部分を空所にした文を書く ※空所に入る言葉をフェルトセンスから引き出す
- ・⑤～⑬キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く ※大事な言葉に波線を引く
- ・⑭新たな文を自由に作り、その後に④の文の空所にキーワード1, 2, 3を入れた文を並べる ※詩の草稿の出来上がり

(2) 詩の清書

(3) 解説

実習にあたり、受講生の中には詩を作成する

3) ただし、「実際に質的データ理解が深まったか」「どのように質的データ理解が深まったか」という点については、本来は詳細に検討すべきではあるが、紙面の都合で扱わないこととする。

ことに対して恥ずかしさを感じる人がいることが想定された。そこで、“詩を作成することは日常的な営みであり、高尚な芸術ではない”という点について共通理解を得るために、講義の予習として「詩」についての資料（阿部（2014）の冒頭: 2-11）の事前配布を行った。さらに、本講義では「庭」をテーマに詩を作成することから、フェルトセンスに注意を向けやすくする工夫として、事前に「自分の好きな庭」の写真を用意するように指示した（I 3 節, I 4 節にて詳述）。

3 実習の題材としての「庭」

TAE ステップで分析できるのは、個人のフェルトセンスに媒介されるデータであるため、ほとんどすべてのものが TAE ステップによって分析可能である（得丸 2010）。ただし、TAE ステップで言語化しようとする、まだ言葉になっていないからだの感覚（フェルトセンス）は、その人が日常的に関わっており、かつ身体的に感じられているようなテーマを扱うことが効果的である。特に本実習においては、個人にとって侵襲性が高いテーマは避け、他者にもフェルトセンスを容易に提示できるようなテーマが適切であると考えた。そこで、本実習では、「庭」をテーマとして扱うこととした。

このテーマの設定にあたっては Tsuchimoto et. al. (in print) による、日本とデンマークの文化を理解するための国際交流ワークショップに取り組んだ事例を参考にした。この国際交流ワークショップでは、「自分のお気に入りの庭」を紹介し合う試みがなされたが、庭を紹介することで「自国の文化の紹介」のような一般的な国際交流とは異なり、個人的に重要な庭の思い出や、特定の庭に対するユニークな視点・解釈を共有できる場になったという（Tsuchimoto et. al., in print）。このように庭は、出身国、社会、年代を問わず比較的共通に理解できるテーマである。また、庭は個人的でありながら公共性を有する

場であり、そこでの経験は他者に語りやすいという特徴があるといえる。一方で、庭は、私たちが日常的に癒し、美、幸せといった感覚を体験できる心理的、社会的、物理的な場でもある。

4 TAE ステップのガイドとしての配慮

オンライン授業内で、複数の受講生に同時進行で、安全かつ効果的に TAE を体験してもらうために留意した点を以下に記す。前提として、TAE ステップ全般のガイドは、公認心理師および臨床心理士の資格を有し、フォーカシングの思想および技術を取り入れながら現場での臨床実践を行い、かつ、大学において演習科目を担当している第 2 著者によって行われた。

一点目に、TAE ステップを行う前に、簡易なクリアリングアススペース（Clearing a Space）を実施した。クリアリングアススペースはフォーカシングの 6 つの動きのうちの第 1 のもので、「気がかりなことの全部を片隅に寄せて、ひと息つき、しばらく休息するために座る場所をつくるようなもの」である（Gendlin 1981=1982）。クリアリングアススペースの技法を冒頭で導入し、TAE 実施中はフェルトセンスに没頭してもらえようにした。具体的には、「課題やアルバイトなど今気になっていることを思い浮かべて、目の前の空間に集めて、一旦横に置いておく。また何か気掛かりなことが浮かんだらそれも横に置いておく…」というような内容を、ジェスチャーを交えながら説明した。

二点目に、イメージを広げるための起点として、事前に任意の庭の写真を用意するように指示した。何もないところから想像力だけでイメージを広げていける受講生もいると予想されたが、イメージをすることに慣れていない人には写真という物理的かつ視覚的なイメージを取っ掛かりにしてもらえるようにした。具体的には、ステップの冒頭で写真を手に持ち、眺めるところを起点としてイメージを広げるようにガイドした。

なお、写真の視覚的イメージは固定されているため、フェルトセンスのシフト（変化）（Gendlin 1981=1982）を阻む可能性がある。そのため、一旦写真を眺めた後には「目を閉じてもいい」と教示し、写真にとらわれずに自由にイメージを変化していくことを許容するようにガイドした。TAEにおけるマイセンテンスはフェルトセンスを掴みやすくするために導入されるものだが、フェルトセンスを立ち上げるための起点として、マイセンテンスと類似の働きを受講生が用意した写真に期待した。

三点目に、フェルトセンスに、十分に、かつ、多角的に触れられるよう教示方法を工夫した。「十分に」という点では、フェルトセンスに触れ、言語化したものを書き出すために十分な時間をとれるようにスケジュールを組んだ。また、教示を行う際には、フェルトセンスにゆったりと触れられるよう声のトーンやテンポに配慮した。「多角的に」という点では、五感および深部感覚（吉村 2004）などの幅広い感覚や感情（清海 2007）にまつわるイメージを活用できるように工夫を行った。具体的には、視覚としての「シーン」「光景」、聴覚としての「音」、嗅覚としての「におい」、味覚としての「味」、触覚としての「肌触り」そして五感のうちどれとも取ることが可能な「思い出」「感覚」、加えて「感情」といった単語を教示に組み込み、順次呈示していった。続いて、ガイドを聴くうちに自分の中から沸き起こってくる「単語」「ワード」「フレーズ」「センテンス」「文章」は何でも、「支離滅裂」に思えても、「違うかな」と躊躇うものも無視せず、とりあえずすべて書き出してあとで吟味するように教示した。

四点目に、受講生がフェルトセンスの表出の水準を調整するように枠組みを設定した。具体的には、できあがった詩の授業内での共有は強制ではないということと、教員に提出することを予め伝えた。フェルトセンスは、その性質上個々人の人生と不可分なプライベートなものであり、その表出物である詩やプロセスを書き出

したシートもプライベートな体験や感情と密接に関わりを持つ。一方では受講生同士の目や反応を気にして過度に防衛的になり、安心して表現できない場合が想定され、もう一方では意図せずにプライベートな事柄や感情を表出し過ぎてしまう場合も想定された。そのため、受講生が各々で表出の水準を調整する必要があった。知的な成果物の場合には受講生が相互に刺激し合う目的で、授業内で共有させることが多いが、今回は強制せずに慎重に行った。また、予め教員へ提出することが前提であることを理解してもらい、提出しても差し支えない水準でフェルトセンスを表出するよう求めた。

五点目に、今回の TAE 体験に対して開かれた構えを持ってもらえるように、補足説明を行った。今回はじめて TAE を体験し、十分にフェルトセンスに触れられなかったり、フェルトセンスを掴めてはいるけれどもうまく言語化できない受講生がいることは十分に予測された。しかし、TAE ステップにおいてフェルトセンスが何も動かないということはありえない。なぜなら、フェルトセンスはそれを持つ本人が意識しようとしまいと、生きている限り常にあり続けるものだからである（Gendlin 2018; 末武 2014）。そのフェルトセンスを意識的に捉えて言語化するプロセスを促すものが TAE であるため、TAE を「失敗した」と強く認識したり、その体験について教員から低い評価を与えられるかもしれないという心配は、自身のフェルトセンスへの不信に繋がりがねず、受講生の心身に（場合によっては重大な）影響を与える可能性を否定できない。そのため、今回の授業において TAE プロセスで十分にフェルトセンスを感じ取れなかったり、表現できなかったとしてもまったく問題はなく、その「うまくできなかった」という体験も大切な体験であることを説明し、受講生が今後フェルトセンスに触れる体験に開かれるようにした。たしかに TAE ステップはフェルトセンスをとらえて言語化するための強力なツールの一つではあるが、決してそれがすべてではない。

各人に適したやり方があり、詩人や芸術家でなくとも人によって馴染み深い日常的な営みである。このことを理解してもらうために、事前に資料（阿部 2014）を配布した。また、事前の説明では開発者のジェンドリン自身も TAE が固定化されたステップとして捉えられることを拒んでいた（Gendlin 2004）というエピソードも添えておいた。

II 方法

1 KJ 法による「授業で学んだこと」の空間配置

本研究では、受講生がフェルトセンスの言語化をどのように経験したかという全体像を明らかにする。そのために、「庭の詩」を作成する実習後に収集し、データ使用・詩の掲載について同意を得られた 9 名分の「授業で学んだこと」（感想）における記述内容を対象とし、KJ 法（川喜田 1967）による検討を行った。KJ 法は、調査によって得たデータを現場の意味に根差してグループ化し、グループ間の関係性の図解化や文章化等を体系的に行う方法である。川喜田（1967）を参考に KJ 法の手順をまとめると次のようになる。

- ①「データの収集」：KJ 法を行うためのデータを集める（インタビュー・参与観察など）
- ②「単位化」：データを適当なまとまりに切片化し、それを小さなカードに記入する
- ③「グループ編成」：親近性のあるカードをまとめ、グループを作る
- ④「図解化」：論理的にもっとも納得がゆく空間配置を考える。また、矢印などを用いて意味関係を示すこともできる

本研究においては、講義の感想を収集したこ

とが「データの収集」に相当する。得られた感想を 1 文ごとに「単位化」し、カードとした。ここで、9 名分の感想から、43 個のカードが作成された。ただし、このうち講義で実施した内容の説明や TAE ステップの説明について書かれた 2 つのカードについては除外し、最終的に 41 個のカードを対象とした。次に、カードを「グループ編成」し、グループ同士の関係を考え、その類似性や関係にしたがって空間配置した。また、矢印を用いてグループ間の関係を示した。グループ編成やグループ間の関係の検討は、第 1 著者と第 2 著者が共同で実施した。

なお、受講生が作成した詩と、その解説を表 3 に示す。本研究に取り組む前提として、筆者らは、受講生のほとんどが「フェルトセンスから語る」（Gendlin 2004）経験ができていたと考えた。これには、厳密な基準があるわけではないが、ほとんどの受講生が詩の中で、個人的経験や感情を主観的なことばやメタファーを用いて表現していたからである。例えば、「雑草のごとく賑やかな声」（受講生 4）という表現の場合、「雑草」と「賑やかな声」は一般的には結びつきづらいという点で、この受講生のフェルトセンスによって結びついた表現であると捉えることができる。

2 倫理的配慮

倫理的配慮として、説明と同意の手続きは以下のように行った。まず、第 10 回の授業後に、受講生全員に今回の作品を研究・教育利用する可能性があり、できる限り協力してほしい旨を口頭で伝えた。また、作成した「庭の詩」と「授業の感想」は、提出すれば出席点になるが、内容によって点数が変わることはないということを伝えた上で、所属大学の学習管理システム上で提出するように伝えた。その上で、「質的研究法」講義の成績発表後に、受講者全員に Google フォームで作成した同意確認書を送付し、「庭の詩」と「授業の感想」の利用可否を尋ねた（ここ

表3 受講生が作成した詩とその解説の一部（データ使用・掲載許可を得たもの）

受講生	作成した詩	解説
1	幼いころの私 泣いていて それがなぜなのかは分からない 目の前で淡く光っているものを見て 小さな安心を感じていた 遠い甘い記憶	幼い頃に訪れたホテルの庭の写真について、淡い光が雲のすき間から漏れ出ている情景について書いた詩です。
3	日々の喧騒から離れ、風が自分をスーッと運ぶ 木々が揺れると同時に私の身体も動かされる 絹のボールにつつまれたかのような心地良さに思わず眠ってしまいそうになる 時々虫が耳の横を通ると、ブンツと音がして私の気持ちも引き締まる 今日も何も変わらない青空を見上げ、自分のちっぽけさを知る それでも風は木々を揺らし、私を運ぶ	家の近くにある公園を散歩している時の感想（〇〇公園） 目的なくさまよっていると、課題や就活を忘れることができます。 自分の中の焦りがどうでも良くなるぐらいに歩き続けていると、「悩んだってしょうがないしとりあえず頑張ろう」と思えます。
4	正月になると親戚が集い雑草のごとく賑やかな声が じーんと私の心を癒してくれる	気分が落ちこんだりした時は ふと思い出し、 少しの元気をくれる、そんな庭です。
6	庭。手入れされていない庭。自然。 自然は力強い。 荒々しくもある草木は柔らかく、どこか物悲しい。 それは永遠の生命ではないからか。 だからこそ、自然は力強い。 日照り続きにも眩しいほどの雷雨にも負けない生命力。 月日の流れが新芽を枯葉に変える。 小さく顔を出した芽はやがて膨らみ、可憐な花が咲けば、実が熟れる。 ただ、その繰り返しが何十億年も続く地球を支えている。 いつまでもみずみずしい。 美しい自然。雑然としたなかに洗練さ確かにもつ、崇高な芸術。	庭を題材にした詩の作成でしたが、私の選んだ庭の風景は自然に近い庭でした。その柔らかな絵画からはモネの池にある美しく透き通った水をたっぷりと吸収し、根から芽、先端へと生命力を行き渡らせている様子を感じました。一見、鬱蒼と生い茂るだけに見える草木にもどこか整頓された雰囲気を感じられ、昆虫たちが集まり、新たな生命の息吹へと繋がっていきます。生命の力強さと、永遠ではないからこそそれらが輝いて見えるという物悲しさ。でも、その儚い流れの反復が長い地球の歴史の地盤となっている、普段思ひの届かないところまで想像が及んだことがとても面白く、何よりも嬉しかったです。現代社会には素晴らしい人工物が山ほどありますが、時にはふと忙しさから離れ、立ち止まり、目の前にある自然を愛でること、季節の移ろいや偶然が作り出した産物を直接肌で感じることの重要性を改めて深く感じました。モネがこの庭を見て思わず筆をとった意味がよくわかりました。
8	リュックを背負って歩く 風が知らない世界を連れてくる じっと見たくて ゆっくり歩く 風が木を花を光をゆらす 知らない人の庭はまるでおもちゃ箱 私の胸が高鳴る もっと奥まで覗きたい そよ風が罪悪感を連れてくる あこがれを置いて、また歩きだす	歩いていると、ふと目に入った道に面した家の庭がとてもすてきだった ときのことを想像して表現した。葉の緑と花の鮮やかさにまず目がいく ので、おもわずじっと見入ってしまうだろうと思った。ただ、家の窓が 開いていて、イスがあることに気づき、自分なら、なんだか居心地が悪 いと感じて その場をすぐ去ってしまうだろうと思った。
9	冷たく痛い空気が呼吸をするとても気持ちいい。 食べ物や人のぬくもりを感じて懐かしい思い出がよみがえってくる。 肌に刺さる空気、寒く痛い気がするけど、家の中のこたつやストーブ、焼いも など冬は寒いけどあたたかい。	冬の雪が積もっている庭を見て、寒い空気とあたたかい家の中や人、 食べ物を対比させて表現しました。
10	遠く霧がけぶるひとりきりの夕暮れ 雨がぽつぽつと池に波紋を作る 時はただ静かに流れゆく	京都旅行の際に、無鄰菴を観に行ったことを思い出して書きました。 あいにくの雨だったのですが、それも情趣があって、すごく感動したの で、なんとか言葉にしようとして試行錯誤しました。
11	バラの紅、紅茶の香り、小鳥の声 ここにあるのは優しい時間 光の粒とそよ風の中 ベンチに腰かけ さあ 聞かせて	写真を見た時に、はなやかなバラやアフタヌーンティーの光景が浮か んで、それを反映させました。「穏やか」というキーワードを解釈した結 果「優しい」というワードが浮かび、「誰か」の存在が浮かびました。これ が最後の「聞かせて」の元になりました。
12	梅雨の空から 空の涙が落ちてくる 空の涙が止んだら 色とりどりのアジサイが より一層キラキラと光輝いている 空の涙でぬれないように カタツムリはアジサイの傘で雨宿り 上を見れば泣き止んだ空に 虹が出て空が笑っていた	庭にあるアジサイを見たときに雨でぬれてキラキラと光ってきれいだった ときの感じを表現しました。暗かった空がうのように晴れ そのときに虹が出ていたということをやうまく表現できたと思います。

で9名の同意が得られた)。なお、併せて、詩や感想を公開する場合は、匿名かつ個人情報から取らない形とする旨を伝えた。

III 結果

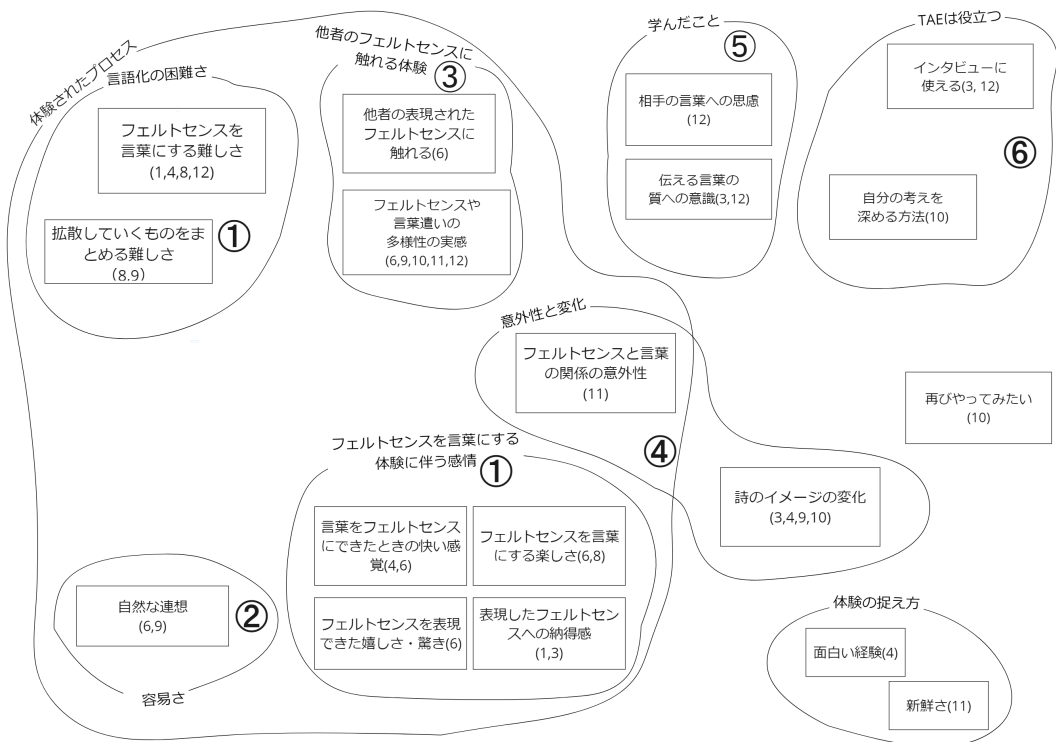
KJ法によって空間配置されたデータを図1に示す。以下では、KJ法による主要な結果について記述する。なお、グループの階層(大・中・小)とラベル名については【大/中/小:ラベル名】と表記する。

まず、感想においては、受講生のほとんどが【大:体験されたプロセス】について言及していた。とりわけ、詩を作成する実習には、受講生はフェルトセンスの言語化の困難さと同時に、様々な感情が伴った。それは、【中:言語化の困難さ】と、【中:フェルトセンスを言葉にする体験に伴う感情】のグループに対比的に表れてい

る(図中①)。例えば、【小:フェルトセンスを言葉にする難しさ】の例として、「そこで感じたことは言葉のイメージを感じとり、それをもとに新しく言葉や文章を形成することの難しさである。」(受講生1)といった感想があった。また、【小:フェルトセンスを言葉にできたときの快い感覚】の例として、「フェルトセンスにぴったり当てはまる言葉を見つけ出す作業は時間はかかりますが、その分見つかった瞬間の達成感は気持ちの良いものでした。」(受講生4)という感想がみられた。

【中:言語化の困難さ】を感じた受講生とは対照的に、【中:容易さ】を感じた受講生もいた。例えば、「私は冬の雪が積もっている庭の写真であつたが、寒いとか冷たいとかだけではなく、その雪や冬から連想される思い出であつたり、食べ物であつたり、どんどん世界が膨らんできて、詩を作るということはこういうことなんだと初めてわかった。」(受講生9)など、TAEス

図1 KJ法による「授業で学んだこと」における記述内容の空間配置
註) 括弧内の番号は、回答した受講生を示している。



テップによって【小：自然な連想】ができていたという感想も記述された（図中②）。この小カテゴリは【小：詩のイメージの変化】や【中：体験の捉え方】とも関連しているのではないかと考えられる。

【中：他者のフェルトセンスに触れる体験】というラベルは、詩をグループのメンバーと共有した経験を示している。例えば、他者の詩を評して「…（中略）…一つ一つの言葉選びが繊細で丁寧で、感銘を受ける作品でした。」（受講生 6）と述べるなど、【小：表現された他者のフェルトセンスに触れる】ことに対する感想も記述された。さらに、「私は、感傷的な気持ちを表現しなかったが、同じ班の人は賑やかで楽しい気持ちを表現しなかったと話していて、性格や考え方の傾向が出ていたと思った。」（受講生 10）という記述や、他のメンバーが「…（中略）…私では思い浮かばない言葉を使っていた。」（受講生 11）といった記述には、受講生が他者の詩における【小：フェルトセンスや言葉遣いの多様性の実感】をできたことが示されている（図中③）

さらに、【中：意外性と変化】のグループに属する感想を記述した受講生もあり、そうした学生は【小：フェルトセンスと言葉の関係の意外性】【小：詩のイメージの変化】について言及していた（図中④）。【小：フェルトセンスと言葉の関係の意外性】の例としては、『優しい』をキーワードにしたが、そのフェルトセンスに『人、空間』が浮かび、自分自身でも面白いなど感じた。」（受講生 11）というものがあつた。【小：詩のイメージの変化】の例としては、「私は冬の雪が積もっている庭の写真であつたが、寒いとか冷たいとかだけではなくて、その雪や冬から連想される思い出であつたり、食べ物であつたり、どんどん世界が膨らんできて、詩を作るということはどういうことなんだと初めてわかつた。」（受講生 9）という感想があつた。なお、この感想は【自然な連想】のカテゴリにも属している。

【中：学んだこと】は、受講生が実習から学んだことを記述したものである。詩の作成を通し

て、受講生は【小：相手の言葉への思慮】【小：伝える言葉の質への意識】が必要であるということ学んでいた（図中⑤）。【小：相手の言葉への思慮】の例としては、「インタビューをする時は自分も相手の気持ちになり、上手く聞き取り相手の表現したいことを明確にすることもインタビューでは必要だと思いました。」（受講生 12）というものがあつた。また、【中：TAE は役立つ】グループの感想として、【小：インタビューに使える】【小：自分の考えを深める方法】という意味で TAE は役立つという評価がなされていた（図中⑥）。

IV 考察

図 1 の空間配置において、特に興味深い点は、【中：他者のフェルトセンスに触れる体験】ができたという点である。受講生は、感想の中で、個々人の意味感覚や言葉の多様性への気づきや、インタビューを実施する際に他者の言葉に対する思慮が必要であるといった、より広い文脈への気づきを記述していた。その意味では、グループでのシェアリングにおいては、他者のフェルトセンスを感受しながら、交流することができていた可能性もある。ただし、このシェアリングでは、zoom のブレイクアウトルーム機能を用いていたため、著者らが受講生同士の会話を聞くことはできなかった。

さらに、受講生は感想の中で、「詩の作成」という本実習が、【小：インタビューに使える】【小：自分の考えを深める方法】といった、異なる文脈においても転用可能であることに言及している。このことは、90 分間で「詩を作成する」という小規模な実習においても、受講生が TAE ステップを実践することで言語化という一般的なプロセスに対して理解を深めることができたことを示している。なお、こうした記述がなされたことの理由の一つは、第 1 著者が授業の冒頭において、「インタビューやフィールドワーク

で、見たり聞いたりしたことを、言葉としてどのように豊かに表現できるかが非常に重要である」「ここで学んだことはインタビューでも必ず生きてくる」と「授業のねらい」を提示したことであると考えられる。ただし、受講生は、感想の中で教師が伝えたことを単に“表面的に”記述したのではなく、【小：フェルトセンスを言葉にする難しさ】などと結びつけながら記述していたという特徴があった。

以上のような体験が可能になった理由として、授業デザインや教師と受講生の関わりの重要性は言うまでもないが、さらに重要なことは、受講生が TAE ステップの実習を通して、自分自身の言葉でフェルトセンスを表現できたという点である。ジェンドリンによれば、個人のフェルトセンスに基づく特別な用語を作りだし、それを保つことができれば、他の人の用語とそれらを交差（crossing）させ、その暗黙の複雑さをいっそう豊かにすることができる（Gendlin 2004）。本実習を通して、受講生自身のフェルトセンスが明確に言語化されたことは、他者の感覚や言葉を深く理解する（そして、受講生自身のからの感覚を豊かにするための）一助となったと考えられる。

V おわりに

質的研究法の初学者が「フェルトセンスから語る」ことをどのように経験したのかを示せたことは、本研究の意義の一つである。TAE の開発者であるジェンドリンは、人々が自分の研究や仕事の分野で、フェルトセンスから語ることを願って TAE を開発したという（得丸 2020b）。TAE には、人々が、今、生きているその場所から体験から意味を創造し、人生の意味を感じながら生きる社会を構想しているという社会的な目的がある（得丸 2010）。本研究は、TAE の考え方を社会実装していくための一つの足掛かりとなる。

本研究の限界として、実習に対する否定的な感想を得ることが難しいという点があった。本研究で扱った感想は、「講義の冒頭にて紹介する可能性があります」と伝えており、かつ、出席点の評価対象にもなっていることから、教員や他者が読むことを前提とした記述であったと推察される。これは、授業実践を分析する上で不可避免的に生じる限界であるともいえる。

最後に、本研究の課題として、実際に受講生が作成した詩の内実や、個々の詩が生成されたプロセスについて十分に扱うことができなかった。詩は、感想のような説明的な文章とは異なり、詩全体として意味をなしていたり（つまり、1 文ごとに切片化して分析できない場合がある）、感覚的なイメージと結びついているといった分析上の困難さがある。こうした観点から、TAE ステップによって生成された詩の特徴を検討することが、今後の課題の一つである。

VI 引用文献

- 阿部公彦（2014）名前をつける—阿久悠「ペーパー警部」、金子光晴「おっとせい」、川崎洋「海」、梶井基次郎「檸檬」ほか。阿部公彦 詩的思考のめざめ—心と言葉にほんとうは起きていること。東京大学出版会、2-33。
- Gendlin, E. T. (1968) The experiential response. In E. F. Hammer (ed.), *Use of Interpretation in Therapy: Technique and Art* (pp. 208-227). New York: Grune & Stratton.
- Gendlin, E. T. (1981) *Focusing* (second edition). New York: Bantam. 村山正治・都留春夫・村瀬孝雄（訳）（1982）フォーカシング。福村出版。
- Gendlin, E. T. (1992) The primacy of the body, not the primacy of perception. *Man and World*, 25, 341-353.
- Gendlin, E. T. (2004). Introduction to thinking at the edge. *The Folio*, 19 (1), 1-8.

- Gendlin, E. T. (2018) *A Process Model*. Evanston, IL: Northwestern University Press. (Original work published in 1997 at New York: The Focusing Institute.)
- 川喜田二郎 (1967) 発想法. 中公公論新社.
- 清海節子 (2007) 感覚表現とは何か?. 駿河台大学論叢, 33, 31–45.
- 能智正博 (2005) 質的研究がめざすもの. 伊藤哲司・田中共子・能智正博 (編) 動きながら識る, 関わりながら考える. ナカニシヤ出版, 21–36.
- 末武康弘 (2014) ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究. 法政大学大学院人間社会研究科提出博士論文第 551 号.
- 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子 (さと子)・村里忠之 (編) (2016) 「主観性を科学する」質的研究法入門—TAE を中心に. 金子書房.
- TaeJapan (2015) TAE とは何か. 日本語教師のための自己成長へのリンク 日本語教育実践経験をことば化する TAE リフレクション. Retrieved February 15, 2024 from http://www.taejapan.org/what_tae.html
- 得丸さと子 (2008) マイセンテンスを詩にしよう. 得丸さと子 (2008) TAE による文章表現ワークブック—エッセイ, 自己 PR, 小論文, 研究レポート……, 人に伝わる自分の言葉をつかむ 25 ステップ. 図書文化社, 49–55.
- 得丸さと子 (2010) ステップ式質的研究法—TAE の理論と応用. 海鳴社.
- 得丸智子 (さと子) (2016) TAE の理論と実際. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子 (さと子)・村里忠之 (編) 「主観性を科学する」質的研究法入門—TAE を中心に. 金子書房, 112–131.
- 得丸智子 (2018) 日本語独習者の研究～アニメ視聴から始まった日本語学習～. 開智国際大学紀要, 18, 37–56.
- 得丸智子 (2020a) アプリを活用した単語学習を中心とする日本語独習～TAE によるインタビュー分析～. 開智国際大学紀要, 19, 35–63.
- 得丸智子 (2020b) 3 パート TAE (Thinking at the Edge) とウェブサイト「TAE リフレクション」. 開智国際大学紀要, 19, 167–175.
- Tsuchimoto, T., Saito, Y., Furuse, M., & Sato, T. (in print). The “Garden Project”: The Potential of an International Exchange Program through Gardens. In Tsuchimoto, T. (ed.), *The Semiotic Field of the Garden: Personal Culture and Collective Culture*. Information Age Publishing.
- ヴィゴツキー, L. S. 柴田義松 (訳) (2001) 思考と言語. 新読書社. (Выготский, Л. С. (1934) Мышление и речь. Ленинград: Государственное социально-экономическое издательство.)
- Willig, C. (2001) *Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*. Buckingham; Philadelphia, PA: Open University Press. 上淵寿・大家まゆみ・小松孝至 (訳) (2003) 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて. 培風館.
- やまだようこ (編) (2007) 質的心理学の方法—語りをきく. 新曜社.
- やまだようこ・家島明彦・塚本朱里 (2007) ナラティブ研究の基礎実習. やまだようこ (編) (2007) 質的心理学の方法—語りをきく. 新曜社, 206–222.
- 吉村耕治 (編) (2004) 英語の感覚と表現. 三修社.

■ 謝辞

「質的研究法」講義の受講生の皆様に感謝申し上げます。

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

